

飛鳥の谷を走る天香山天の北極軸の発見：
教員免許状更新制度下の日帰り巡検¹⁾

木庭元晴

はじめに

教員免許状更新講習を2018年10月6日土曜日午前10時から明日香村で実施した。台風25号の強雨のなかで始まった。その後、雨天を挟みつつも好天に恵まれてかなりの日焼けをするほどであった。限られた奈良交通が運行する明日香周遊バス赤かめの最終便をにらみつつ、午後5時には明日香村中央公民館でのペーパーテストを終えた。当初予定していた「あすか夢の楽市」そばの野外での昼食を、県立万葉文化館に隣接する屋内外ともに着席可能な「ASUCOME (あすかむ)」へと前日に変更した。それに合わせて巡検ルートも一部変更した。不幸中の幸いというか、台風の影響で昼食時の混雑を避けることができた。昼食休憩は午後1時から1時間を取った。教務センターからの森知美さんの付き添いはありがたかった。携帯スピーカーは必需品ではあったが満足のゆくものではなく、肉声での伝達も必要ではあった。

参加者は14名の小中高教師で、一人は遠方の鳥取市からでかつての卒業生であった。教員免許状更新のための講習に求められる内容は、講習担当者独自の研究成果からでなければならない。日頃、教育に追われている先生方の時間を削いで実施される講習は、講習担当者が単にお勉強した内容では許されないと思っている。ギリギリの研究努力の上で築き上げられた内容でなければならない。教育三昧の日常から離れて、学びの中核の知の源泉に触れていただくことで、再び教育現場に戻っていただく、そういう流れこそ、この教員免許状更新講習に意味があると筆者は考える。アカデミーで常識とされることや言い古されたことを得々と語ってはならない。明日香が中高年に人気の観光地であることから、なおさら単なる観光的または説明的態度は避けるべきである。

そういう配慮の上に、木庭の過去数年の研究成果を踏まえて教材を作成した。この本に関西大学出版部から出した次の本を主要資料としている。お読み頂いている博物館報のこの一編は、主にこの本に基づいて参加者のために作成した筆者ウェブページを改変する形でまとめたものである²⁾。受講者には前もってこのウェブページの所在は連絡しており、このA4サイズで48ページに及ぶウェブページは、森さんによって印刷され、現地で配布された。このページのかなりの分量になる図表もすべて森さんによってカラー印刷され、前もって参加者に送付された。巡検当日に確認したところ、前もって当該書籍を購入された方は1名に止まった。次の章に述べる現地でのwifi使用に関わって、スマートフォン用ソフトウェアGeographicaを前もってインストールしていた方は6名ほどに過ぎず、巡検時の使用は残念ながらできなかった。この比率はまあ、教師指示に対する生徒たちの反応とはほぼ同率ではないだろうか。以下、参加者への指示などについて

紀要

三校

は参加者に語りかける文体にしている。

なお、出典を明記していただければ、教材などにご利用いただいても問題ない。

木庭元晴, 2018. 飛鳥藤原京の山河意匠—地形幾何学の視点—, 関西大学出版部³⁾。

I. スマートツールの利用

I.1 wifi利用

明日香村観光サイトにスマートフォン用の音声ガイドサービス「なら飛鳥京歴史ふらり」⁴⁾が公開されています。前もってインストールして機器を持参ください。スマートフォンをお持ちでない方はもちろん問題ありません。これを使うことが必須ではありません。ただ、飛鳥時代の遺跡地図（飛鳥京絵図）とスマホ利用者の現在地との関係などを知ることができます。ただし、図は漫画的で厳密には実際の位置からかなり歪んでいます。

明日香村にはフリーwifiスポットがあります。その場所は、次のページに示されています。

https://asukamura.com/?page_id=8272

ただ、これでは位置認識に不便で、wifiやインターネットではなくて、次に述べるスマートフォン自体のgpsとキャッシュメモリーを利用した方がはるかに便利です。

I.2 gps単独利用

自宅などで前もってネットで地図を表示するとキャッシュメモリーに記憶されるので、ネット環境のない屋外の環境であってもその地の電子地図が表示され、現在地などにマーカーを設定するなどのことができます。推薦したいフリーソフトはGeographicaです。 <http://geographica.biz> このサイトには、機種に応じたアプリのダウンロードリンクが示されています。ダウンロード中、「Geographica」使用中に位置情報の利用を許可しますか？などのメッセージに対して許可を選択してください。なお、利用法のpdfは次に公開されています。

http://geographica.biz/tmp/geographica_easy_use.pdf

ダウンロード後、次のプロセスを実行して、現地にご持参ください。

1. Geographicaを立ち上げると富士山頂の地図が表示される。その最上部の座標などの情報が表示されている部分を指で左にスライドすると、検索欄が現れる。
2. ここで、明日香村と入力してください。表示結果はこの場合、1件だけが現れるので、これにタップすると、飛鳥稲瀬殿跡付近に飛びます。
3. この画面で1本指を使って下方にドラッグして、より北の方を見て行くと、橋寺本堂や明日香村役場の位置表示を見ることができます。明日香村役場が面する東西道路を西にとって600mほど行くと、巡検の最終目的地で試験実施会場である川原の明日香村中央公民館があります。
4. 明日香村とその周辺の地図を親指と人差し指でピンチアウトによって拡大したり、ピンチインによって縮小したり、人差し指または中指でドラッグやフリックによって移動したりして、少なくとも明日香村全域について、詳細に、そして広域に地図を表示してみてください。これがスマートフォンのキャッシュメモリーに保存されて、ネット環境がなくても現地でこの

地図利用が可能となります。

なお、用意されている地図は、最初に表示される国土地理院の2万5千分の1地形図（陰影図）以外に幾つかの地図があります。画面左上の橙色のメニューボタンを押すと、サブメニューが現れ、地図ボタンを押すと、国土地理院の標準地図が選ばれていることがわかります。この3行下の航空写真を親指などでタップしたあと、左端最上部のメニューボタンをタップしてください。表示が薄いのですが、航空写真（慣例的には空中写真と称する）地図が現れます。上述と同様に、奈良盆地全域が見えるように広域（縮小）表示し、明日香村付近では田んぼ一枚一枚が表示されるように詳細（拡大）表示するなどしてください。

iPhoneでのタッチパネルの操作法は次のサイトを参照してください。

http://www.apollomaniacs.com/ipod/howto_touch_touchpanel.htm—タッチパネルの基本操作

5. 現地に行く前に、自宅などネット環境がある場所で、現地でのマップ利用の利便性を得るため、マーカーを一つだけ登録しておきましょう。

5.1 まずはGoogleマップで、明日香村中央公民館、を検索して、位置を表示して、それを見ながら、その位置をGeographica画面中央の十字マークにドラッグしてください。

5.2 画面右手の上から4番目のマーカー追加ボタン（Googleの地点記号の右上に+記号が表示されている）をタップしてください。名前などの入力枠が出てきますので、名前欄に、明日香村中央公民館、としてください。

5.3 入力後、この場所には菱形内に+記号が描かれたマーカーが登録されます。これをタップすると、名前と経緯度と海拔高度、さらには、スマートフォン利用者の現在地からの磁方位、直線距離、比高が表示されます。表示を消すにはこのマーカー以外の地区上の任意の点をタップしてください。

現地では、ご自分で必要と思われる場所で新たなマーカーを随時、追加してください。

II. ロードマップ

II.1 集合

集合日時：2018年10月6日（土曜日）午前10時

集合場所：明日香村農産物直売所 あすか夢の集市（トイレ小屋あり）

自家用車利用：次に述べる公共交通が不便のために、自家用車が有効です。行楽シーズンのために、この集市の駐車場が確保できない場合があります。駐車場は有料の場合1日500円程度です。

駐車場情報：集合場所の「あすか夢の集市」、以下、近いものから遠いものへ、飛鳥川を隔てた甘藷ヶ丘駐車場（500円）、飛鳥歴史公園甘藷ヶ丘地区川原駐車場、豊浦駐車場 0744-54-4577 など。自己責任をお願いします。

公共交通利用に関する注意点：近鉄（大阪阿部野橋駅または京都発）の根原神宮前（F42またはB42）下車、東改札口を出て、右手のタクシー乗り場の前付近の②番乗り場（奈良交通明日香周遊バス（赤かめ））から出ます。切符は、明日香周遊バス1日フリー乗車券（大人650円）がこの東改札口で購入できますが、予定利用ルートは、根原神宮前から公共交通を

利用される方については、行きは榎原神宮前—飛鳥、帰りは中央公民館—榎原神宮前ですので、窓口でお聞きください。参照資料は次のものです。

https://asukamura.jp/kame_bus/pdf/timetable_aka_180401.pdf

発車時間は1時間間隔で、集合に最も適当な便は、午前9時36分発で10分ほどのちに到着します。「甘樫丘」の次の「飛鳥」で降車してください。下車側のバス走行方向に見える広場が集合場所です。

https://asukamura.jp/kame_bus/pdf/timetable_aka_180401.pdf

赤かめバス停分布図

[https://www.navitime.co.jp/bus/route/00009799/23他%E3%80%944明日香周遊：榎原神宮→大仏→岡方面%E3%80%95\[奈良交通\]](https://www.navitime.co.jp/bus/route/00009799/23他%E3%80%944明日香周遊：榎原神宮→大仏→岡方面%E3%80%95[奈良交通])

II.2 解散

解散日時：同日午後5時頃

解散場所：座学と試験を実施する明日香村中央公民館

634-0141奈良県高市郡明日香村大字川原91-1 電話0744-54-3636。

ここでは近隣の小学校スペースとともに、広い駐車場が確保されています。集合場所との距離はありますが、朝からの駐車が可能とのことです。

公共交通利用に関する注意点：中央公民館に面した図書館の前から、16時47分に上記の赤かめがでます。自家用車で来ている方も、駐車している場所の最寄りのバス停まで乗ってください。これを逃すと、ご自宅によっては、公共交通での当日中の帰宅が厳しくなる可能性があります。このバスは周遊して16時51分に中央公民館近くに戻ってきますが、16時47分の乗り場がより近くなります。このバスは榎原神宮前の東口までまいります。木庭は、集合場所の「あすか夢の楽市」に近い飛鳥で下車します。

III. 巡検ルート

III.1 昼食の場所について

県立万葉館そばのASUCOME⁹⁾で昼食を摂ります。食事は4店舗で供給されています。明日香村との二年契約のために店主には厳しいものがありますが、廉価で美味しい食事が提供され、座る場所は館内で詰めると35席ほど、屋外にも屋根付きのベンチがあります。土日は一般的にはかなり混むようです。

III.2 現地での費用

交通費(各自)+昼食代(各自)+橋寺拝観料(各自350円) 交通費の内訳は、榎原神宮前からバス利用の場合、最大650円です。参加者で利用するのは、最長、中央公民館から榎原神宮前までです。自家用車で集合場所(あすか夢の楽市)以外の駐車場利用で、無料駐車場が確保されない場合は500円ほどです。

表し替へ、お礼いす X⁹⁾

1.~6. E
①~⑥ に 対応

III.3 全ルートの概要

資料1(図1)には、Google 目印で代表的な位置を示しています。北から南へ訪問順に、①水落遺跡と甘樫丘周辺、②飛鳥寺と東山漏刻用水池跡? ③昼食先のASUCOME、④飛鳥京跡Ⅲと苑池、⑤橋寺五重塔跡、そして、⑥亀石周辺と、座学と試験を実施する中央公民館、となります。さらに図1には、木庭の分類した飛鳥川河谷内の河岸段丘を示しています。赤枠：a面、橙枠：b面、黄緑枠：c面、黄枠：d面(現氾濫原)

本巡検でご紹介する見解はすべて木庭のオリジナルで、確証も得ております。

IV. 水落遺跡と甘樫丘周辺

IV.1 水落遺跡と天香山軸

あすか夢の楽市の駐車場の南側に接して、水落遺跡があります。発掘結果に基づいて、中央を除く24本の電信柱を切り揃えたような木の柱が設置されています。この基壇面上の北西隅には地下への窓が開いていて、実際の柱の礎石が見えます。

資料2(写真1)を見ると、水落遺跡基壇中央から、北方向真っ直ぐに天香山山、西面すぐそばに甘樫丘が立ちほだかる。このように、水落遺跡の施設から天香山山と甘樫丘との間の深い関係性が推測されます。

資料3(図2)では、水落遺跡の遺構実測図から筆者が遺構中心を求めています。基壇の石組みから正方形を求めて、その対角線を描いたものですが、それは柱の礎石の中心点を正確に通っています。この図そのものはGrassGISのCS-VIのLocationに配置したものです。

資料4(表1)に示しますが(計算法などはここでは省略)、上の図の対角線の交点である柱心交差心PICと天香山山頂の東西軸 easting座標値(赤字の数値)の差は、-16692.43(-16692.49)=0.06、つまり、6cmにすぎません。つまり、天香山真北軸上に水落遺跡基壇中央が眠っているとして良いでしょう。

このことは、水落遺跡がこれまで言われてきたような漏刻設置のための場所では単にないことを示唆しており、極めて高い精度で立地設定がなされた場と言えるでしょう。つまり、天文台です。天文台での天の北極を周回する星の観察によって、時刻だけでなく、主に大陸由来の元嘉暦との対応関係がまずは取られ、正確な日付と時刻が求められたと考えています。

IV.2 甘樫丘山頂から大和三山と飛鳥の谷を眺望し、大和三山の太極に関わって論じる

甘樫丘山頂から大和三山と飛鳥川扇状地の配置を眺望します。所要時間は、あすか夢の楽市から山頂までゆっくりと歩いて15分ほど。途中、万葉集にみえる幾つかの樹木にメッセージが付されています。クヌギやカキなどからなる里山的植生で、この登山道のために植樹されたものと、整備前の元々の里山植生が混在しています。次の資料5~7の3枚の写真は現地で撮影したものです。

IV.3 甘樫丘山頂で大和三山の太極に関わって論じる

この節は、木庭(2018b, 第VI章)に基づいています。従来のアカデミズムの因習的かつ感覚的

なロジックを排しており、興味を持たれた方は是非、本書を読んでいただきたいと思っています。以下、極めて断片的に記述します。まずは、御井の歌の訓読を次に。

『万葉集』巻一の五二番歌「藤原宮の歌」=「御井の歌」(歌人知らず)

訓読： やすみしし 我ご大君 高照らす 日の皇子(みこ) / 荒袴(あらたえ)の 藤井(ふぢい)が原に 大御門(おほみかど) 始めたまひて / 壇安(はにやす)の 堤の上に あり立たし 見(め)したまへば / 大和の 背(あを) 香具山は 日の経(たて)の 大御門に 春山と 茂(し)みさび立てり / 畝傍(のこ)の 瑞(みづ)山は 日の緯(よこ)の 大御門に 瑞山と 山さびいます / 耳成(みみ)の 背菅山(あをすがやま)は 背面(そとも)の 大御門に よろしなへ 神(かむ)さび立てり / 名ぐはし 吉野の山は かげともの 大御門ゆ 雲居(い)にぞ 遠くありける / 高知(たか)るや 天(あめ)の 御蓋(みかさ) 天(あめ) 知るや 日の御蔭(みかげ)の 水(みづ)こそば とこしへに あらめ 御井(みい) (みる)の ま清水

(University of Virginia Library, 1999a:『万葉集』巻一 雑歌)

上の訓読の次の部分：

／大和の 背(あを) 香具山は 日の経(たて)の 大御門に 春山と 茂(し)みさび立てり
／畝傍(のこ)の 瑞(みづ)山は 日の緯(よこ)の 大御門に 瑞山と 山さびいます
／耳成(みみ)の 背菅山(あをすがやま)は 背面(そとも)の 大御門に よろしなへ 神(かむ)さび立てり
／名ぐはし 吉野の山は かげともの 大御門ゆ 雲居(い)にぞ 遠くありける /

について、木庭の意訳を次に示します。

天皇が香具山を直視される、その上に架かる日を直視される、これを日の経という。天香具山の真上に日が違して、香具山の影が手前に長く伸びる。次に、左頬に日を浴びつつ右手直角方向に畝傍山を直視される。これを日の緯という。天皇が直視される日の背面には耳成山が控えている。そして、天皇が直視される香具山上の日の下(=かげとも)には天武天皇と過ごされた吉野の山がある。

木庭によれば、不老不死の東海の三神山、蓬莱、方丈、^{たいりゅう せんざ}瀛州に準えられた大和三山から求めた垂心(資料8)が大和三山の太極にあたる。その根拠は、この万葉集「御井の歌」に求めることができる。そして、大和三山の太極は、藤原宮の大極殿と朝礼院の境界をなす^{すゝめ}閉門にはほぼ一致している。

次の二つの図(資料9、10)は、「御井の歌」に示された大和三山頂上から垂心を求めるプロセスを示している。

資料9は、木庭の上の意訳の次の部分である。

天皇が香具山を直視される、その上に架かる日を直視される、これを日の経という。天香具山の真上に日が違して、香具山の影が手前に長く伸びる。

資料10は、上の意訳の次の部分にあたる。

次に、左頬に日を浴びつつ右手直角方向に畝傍山を直視される。これを日の緯という。天皇が直視される(天香具山直上)の日の背面には耳成山が控えている。そして、天皇が直視される香具山上の日の下(かげとも)には天武天皇と過ごされた吉野の山がある。(ここでは図を示していないが、耳成山から天香具山を通過する線分の延長に正しく吉野宮がある。これについては、今後、発表予定ではある)

IV.4 飛鳥川の争奪地形

資料11(写真5)は水落の河川争奪地点の現状を示しています。現飛鳥川は手前から左手奥に流れています。この河川の屈曲は飛鳥川の争奪によるもので、それ以前は元飛鳥川がこの奥の雷丘の右手を流下していました。

上記資料11(写真5)の河川が左折する場合は、次の資料12(図6)のP点の部分です。等高線間隔は1mで、北流する元飛鳥川が争奪されて現在の飛鳥川になりました。

資料13(図7)のブロックダイアグラムはW.M. Davisによるものを基図としています。木庭(2018c, p.78)の抜粋を次に。ただし、指示表現などは文脈に従って変更しています。

この記述を進める上で、河川争奪の解説が必要であろう。地形輪廻説を掲げたデービスによる資料13上図では、大陸域に見られるケスタ地形をなす流域にあって、その主要河川に深い谷が迫っている。下図では上図の主要河川に小流域の谷頭部が到達して、上図の主流が樞成していた流域での急激な下刻が始まっている。上図の主流はいわば資料12の元飛鳥川で、争奪した河川は現在の飛鳥川にそれぞれ対応している。下図の争奪の肘の屈曲部が資料12のP点に対応している。資料13では主流の右岸から争奪されているが、資料12では元飛鳥川主流の左岸から争奪されているという違いはある。資料12のP点の北に続く丘陵列は、元飛鳥川と飛鳥川の分水嶺をなす。資料12の等高線を読み取ると、元飛鳥川は200mほどの幅を持っていたことがわかる。この争奪地形が自然のものか人為的なものかは、筆者はこの争奪に出会った2012年以降、確証が持てなかった。

11

資料14(写真6)は争奪点Pから少し上流側の、あすか夢の楽市つまり水落遺跡に近い甘樫丘への石標群がある橋のたもとから上流側を撮影したものです。この写真にみえる飛鳥川の右手にあたる左岸は、左手あたりの右岸より低い。水落遺跡が戦る左手の地形面は飛鳥川線状谷の河岸段丘c面で、右手の背い崖根がある住居や水田や果樹園が戦る地形面は河岸段丘d面に該当します。飛鳥川争奪時期は、この位置関係ゆえに、水落遺跡よりも遡ることになります。つまり、次の日本紀の記述から水落遺跡が成立したとされる斉明六(西暦660)年が、争奪の上限年代となります。なお、d面は事実上、現飛鳥川の氾濫原にあたっています。

又 泉太子 初めて漏卮を造り 民に時を知らしむ

柱上α杭大枠内

V. 飛鳥寺と東山瀧刻用水池跡？

飛鳥川から水落遺跡の東辺の歩道を南下して飛鳥寺西門跡に向かい、蘇我入鹿の首塚そばの中ツ道軸を確認します。

V.1 価値軸の転換/天香具山軸から離れて大和三山に拠る中ツ道軸へ

資料15(図8)のごとく、飛鳥寺域(奈良県考古遺跡データベースでの範囲を薄いオレンジ色域の赤斜めクロスチェックで表示している)での伽藍配置は西偏しています。飛鳥寺造営時には、仏塔を中心軸として東西縁辺は等距離にあったと考えられます。この図のKagu-yama axis天香具山軸が飛鳥寺域の西辺と考えるのです。天香具山軸と飛鳥寺はこういう形で関わりつつ、造営されました。飛鳥寺伽藍の仏塔心を通過するCentral axis中心軸に関わって、飛鳥寺域東辺との距離と飛鳥寺域西辺との距離が一致することになります。

V.2 飛鳥寺西門跡

飛鳥寺造営の際には、天香山軸上には元飛鳥川の氾濫原がありました。飛鳥寺を天香具山軸と関連づけるために、飛鳥寺仏塔を「天香具山軸を西縁とする東西等距離境内域」の中心軸に配置したと考えられます。

その後の価値転換、「大和三山の太極決定による中ツ道軸導入」によって、境内西方が切断され、1956年の発掘で得られた伽藍群が境内域の中心軸から西偏する結果となったのでしょう。いわゆる飛鳥寺西方遺跡=観の木広場は、当時の飛鳥川、つまり、元飛鳥川の氾濫原にあたり、この氾濫原をも飛鳥寺境内と見做されていたのです。

あらたな価値軸の転換によって、飛鳥寺境内西部は切断されました。それを補償するかのようには飛鳥寺の四門のうちで、もっとも立派な西門が造営されたと考えられます。西門は新たな価値軸である中ツ道に直接面するようになりました。その発掘結果の一部を、飛鳥寺西門跡で見ることができます。

資料16(写真7)の奥のほぼ中央の伽藍は、安居院⁶⁾(あんごいん)本堂で、飛鳥時代の飛鳥寺の仏塔心はこの右手(南側)の庭にあります。安居院本堂は、飛鳥時代の飛鳥寺の中金堂に位置しています。

手前の切石を2段重ねた左右(北-南)方向の高まりには平たい丸石が2箇所、配されています。これは八脚門であった西門西部の控え柱2本(軸間距離3.5m)の位置を示しています(後に詳述)。

飛鳥寺境内には発掘によって明らかとなった仏塔跡を資料17(写真8)のように見ることができます。

資料18(図9)は発掘結果に基づく復元図(明日香村製)です。この左手が北方向で、手前の門が八脚門の西門です。

資料19(図10)には八脚門がわかりやすく表示されています。

1956年の調査で検出された飛鳥寺西門の構造については、1996年に検証発掘が実施されていません(奈文研(花谷), 1997)。この資料20(図11)右下の2×3のグリッドの補助線が入ってシェーディングされた部分が西門遺構にあたります。このシェーディング域東辺では、想定される屋根からの雨落溝が1956年には検出されています。1996年の調査では、前述の八脚門の北西隅の控え柱跡が新たに検出され、八脚門であることが確認されました。この図のシェーディング域の北西部の濃いグレーの2個の擬似円で示されたところ。[1956年の調査によって、西門は礎石建ち八脚門と推定され、正面11.3m(高麗尺32尺)、奥行き5.3m(高麗尺15尺)、推定基壇規模が正面13.8m、奥行き9.3mに復原された。正面の柱間は中央だけが4.2m(12尺)、両脇が3.5m(10尺)で、中央間が広い。(中略)南門は正面8.8m、奥行き4.6mで、西門の方が大きい」(p.44左段)。「1956年の調査では、基壇の一部および南北3列ある柱のうち、(図のように)棟通りと東側柱筋の合計7箇所て柱位置確認」(p.44右段)が確認されている。「今回は、(前述のように)西側柱筋の柱位置2箇所を確認し、八脚門を確定した。(中略)北西隅の礎石堀形は、直径1.3m、検出面からの深さ15cmで、黄褐色山土が版築状に詰まる」(p.44右段、p.45左段)。

上述最後の引用について、確認と注意喚起をします。この引用部の「西側柱筋の柱位置2箇所」は、上の筆者の資料16(写真7)の「八脚門であった西門北西部の控え柱2本(距離は3.5m)」に対応しています。上述最後の引用で、「北西隅の礎石堀形は、直径1.3m、検出面からの深さ15cmで、黄褐色山土が版築状に詰まる」とありますが、これは神武紀に記された天香具山の埴土(はにつち)の可能性が高いと思っています。

天香具山の埴土は神武紀に表れていて、この埴土を使って平瓮をつくり、天神へのお供えすることで、相次ぐ戦勝となり、神武天皇は大和にたどり着きます。青木(2017, p.140)には、「それが藤原宮大極殿南門と大宮大寺の堂塔だ。これら(吉備池畔寺と併せて)三遺跡は、いずれも天香具山の周辺に所在すること、天皇が造営を命じた施設という点が共通する。天香具山の周辺には、これらの版築土とよく似た山土がある」とあり、飛鳥寺西門控え柱の基礎の黄褐色山土が、天香具山由来の可能性は高いと思われるのです。

成迫(2010)は、天香具山と畝傍山の埴土を使って、平瓮を実際に焼いており、前段で次のように言っています。

「日本書紀」の神武紀で神武天皇が、「住吉大社神代紀」で神功皇后が、天香具山山頂の埴土で天平瓮(あめのひらか)という皿状の土器を作って天神と住吉大神に戦勝を祈願したという記述がある。また、畝傍山には、住吉大社の使いが山頂で埴土を採取し、持ち帰って祈年祭・新嘗祭の為の平瓮を作成する埴土神事が現存する。その起源は少なくとも13世紀以前に遡ることがわかっている」。緒論の一部として、「天香具山山頂には斑レイ岩起源の埴土(赤埴)が分布する。埴土鉱物はハロイサイトとモンモリロナイトで、鉄分を多含するため焼成すると赤系統の色味を呈する。可塑性が大で土器の原料に適している」とあります。

V.3 飛鳥寺伽藍北縁と甘樫丘2峰軸

資料21(図12)に見えますように、飛鳥寺伽藍北縁線e-c-bと甘樫丘東西2峰軸d1-d2が一致します。水落遺跡から飛鳥寺西門跡までの道の西門に近い地点でこの甘樫丘東西2峰軸を観察できるはずではありませんが、甘樫丘が樹木で覆われていて、東西軸上の二峰を観察することができ

せん。これは甘樫丘内の峰伝いの道からも同様でした。現在でも、落葉後であれば可能かもしれません。この軸線の設置当時、つまり飛鳥寺設計時には、甘樫丘は乱伐でd1-d2軸が容易に観察できた可能性があります。

資料21(図12)が主張しているのは、飛鳥寺伽藍北縁が甘樫丘と幾何学的につなげる措置が成されたということです。飛鳥寺の東西位置は天香山、南北位置は甘樫丘に、天の北極軸またはその垂直線を使って幾何学的に対応づけられたことになります。甘樫丘に関わる部分はこの図を掲載している第VI章コラム「飛鳥寺城東斜辺から唐尺を使って推古紀の天香山軸および甘樫丘軸を捉える」(pp.222-234)を参照してください。

V.4 水落遺跡漏刻用水路を辿って東山漏刻用水池跡?へ

飛鳥寺西門跡から、飛鳥寺境内を通過して、東山漏刻用水池跡?に向かいます。このルートは前述のように台風到来による変更の結果です。水落遺跡には漏刻があり、鋼管を含めたその配水系が発掘されています。その水源を辿ってみます。以下に、木庭(2017a, pp.8-9)の「Ⅲ 東山漏刻用水池の提案」を抜粋します。

さて、水落遺跡の実測図である図1(本報告の資料3(図2))を見ると、漏刻用と考えられている用水が東側から供給されている。用水はどこから得られたものであろうか。図6(本報告の資料22(図13))中央を占める飛鳥川扇状地の等高線図を見ると、太い実線で示す小分水嶺を知ることができる。これを境に、西よりの斜面と北寄りの斜面に分けることができるのである。水落遺跡は、天香山の天の北極軸上に載る必要があったが、南北方向の位置決めは水の入手ルートと関連し、水落遺跡を北寄りの斜面が属する小流域に位置づけることで、入手ルートが飛鳥寺の境内を通過することが可能となる。

この場合、水源をどこに求めることができるのか。それは飛鳥池工房遺跡の50m北東方の仮称「東山漏刻用水池」である。この楕円形の凹地は図6では1m間隔の等高線の108mに対応する。この北西方(下流側)に隣接する等高線は別の108mで、南東方(上流側)に隣接する等高線は図5水落遺跡周辺の高高度段彩図(表示を省略する)109mである。この凹地は、のちに述べる空中写真の実体視によって見出すことができた。この「用水池」は飛鳥寺域外に位置している。この「用水池」から水落遺跡までのルートはもちろん発掘資料にはない。

従来の研究では飛鳥川本流からの取水が想定されている。水落遺跡は、飛鳥川の河岸段丘上に位置しており、河岸段丘面に沿って、飛鳥川はかなり上流から取水して水落遺跡に導くことは可能ではある。この場合、飛鳥川の水位変動は激しく通年で取水には種々の工夫が必要ではあろう。この「東山漏刻用水池」からの取水説が飛鳥川からの取水の可能性をもちろん否定するものではないが、前者の方が後者に比べて圧倒的に簡便なことは確かなことである。

巡検では、水落遺跡から飛鳥寺境内を経由して、飛鳥池工房遺跡そばの東山漏刻用水池?に向かいました。提出された感想文の中には納得できたという記述もありました。仮称「東山漏刻用水池」は空中写真判読で得たものです。この凹地地形を強調しているのが、地主さんの宅地造成の所作です。資料23(写真9)で地主さんが立っているのは仮称「東山漏刻用水池」堤上です。石面(いしづら)と視角がほぼ一致しており見にくいのですが、このすぐ右手には石垣があって段差があります。

「東山漏刻用水池」に当たるところは水田になっていて、ほぼ埋没していますが、この周辺の河岸段丘の地形の観察から、この場が用水池に適していたことがわかります。この報告とは別に空中写真判読によって河岸段丘地形を示したいと考えています。資料24(写真10)には、「東山漏刻用水池」に接して流れる現在の用水路を示しています。

この東山漏刻用水池のすぐ上手には飛鳥池工房遺跡があります。花谷(1999)にその概要が示されており、飛鳥池遺跡発掘遺構図が示されています。この図を見ますと、この遺構のすぐ北側が東山漏刻用水池に当たります。花谷の要旨には、この遺跡は「7世紀後半から8世紀初めに操業された一大工業団地を中核とする遺跡」とされ、「飛鳥寺御原宮や藤原宮と密接な関係をもつが、一方では飛鳥寺や東南禅院とも深い係わりがある」とされます。

木庭はこの飛鳥池工房遺跡の存在すら知らず単純に地形から、仮称「東山漏刻用水池」を求めました。水落遺跡の漏刻設置が斉明6(660)年とされますので、この遺跡の上記存続推定年代に近く、漏刻用水池と飛鳥池遺跡との間に直接的な関連性があるかも知れません。飛鳥池遺跡造成前の地形を近い将来、復元したいとも考えています。なお、飛鳥池工房遺跡は、江戸時代に築かれた溜池であった飛鳥池の埋立工事に伴う事前調査で明らかになったものであって、工房が立地した当時は河岸段丘面に当たっていたと考えています。

もちろん、現在の水路から古代の水路を想定できませんが、飛鳥寺が立地する集落や耕地には仮称「東山漏刻用水池」付近からの用水路が水落遺跡付近まで続いています。その一例を資料26(写真12)に示します。

VI. ASUCOMEでの昼食

東山漏刻用水池跡から昼食を摂る県立万葉文化館そばのASUCOMEに向かう。その入り口には、亀形石遺物と厩船石の見学の受付がありますが、後を振り返って飛鳥宮都の谷を見下ろすと、遠くに甘樫丘、近くに吉野川分水を見ることができます。

ASUCOMEでのカフェや食堂の展開は万葉文化館の公募に応じることで実現します⁷⁾。経営環境がかなり厳しい中、おいしい食事を提供されています。1時間の休息を取りましたが、参加者の中からの亀形石遺物や厩船石の自主的な見学はありませんでした。

VII. 飛鳥京跡Ⅲと苑池

VII.1 飛鳥京跡Ⅲ

発掘で復元された飛鳥宮跡(2016年に伝飛鳥板蓋宮跡から変更)の石組みなどを見ました⁸⁾。資料28(図14)に飛鳥宮跡の位置を示します。この図の内郭の枠内のうち、赤字で伝飛鳥板蓋宮跡

史跡指定地とされる北東隅の不定形の赤枠が公開されている部分にあたります。

資料29(写真14)は、東側から甘樫丘に向かって撮影しました。大井戸跡と甘樫丘の間に、大井戸跡に近接して植え込みが見えますがこれは建物跡です。柱跡にコンクリート柱を置き、ツゲが植え込まれています。万葉集 第13巻(3295) 詠み人知らずの署名な歌⁹⁾から着想を得たものでしょうか。この後背部の白く光る墨根は、次に訪問する飛鳥宮跡苑池そばの資料館などです。

VII.2 飛鳥京跡苑池

河岸段丘の形成環境と飛鳥川の付け替えの時期について考えます。ここは、上述の資料28(図14)の青線で囲った飛鳥宮跡の内郭北西隅に隣接する部分です。資料30(写真15)は、苑池 Aug. 25, 2018現在の発掘現場です。土曜日のために発掘作業は休止中です。発掘関係の白っぽい壁のプレハブ小屋が聳る部分は飛鳥川緩状谷の段丘b面で、この左手の発掘場も同様のb面で、苑池遺跡を構成します。これより一段高い手前の緑地は元飛鳥川の扇状地面にあたり、もっと手前の薄茶色の盛り土上には飛鳥宮跡資料館が建っています。左手の日陰斜面が見える山は甘樫丘で、正面の日陰斜面を見ているのは天香山です。

資料31(図15)は、GoogleEarth上に、飛鳥川緩状谷の河岸段丘と、古飛鳥川、元飛鳥川、そして現飛鳥川などを示しています。河岸段丘は上位から、a面(赤色枠)、b面(黄色枠)、c面(水色枠)、d面(白色枠)と区分されます。「飛鳥宮跡Ⅲ」と付した白丸の手前に板蓋宮跡があり、右手前の黄色枠で示したb面には苑池跡があります。

資料32(図16)は、隣接する実体視可能な空中写真上に、地形境界と字境界などを載せたものです。発掘場所はここのうちの北池にあたります。ゴミ田とした凹所のすぐ西側には天香山軸が走ります。これより西側では、左側の白い破線部は高まりになっています。苑池が造成されたのは斉明期と考えられており、同定時代が水落遺跡と一致します。この苑池跡は前述のようにb面に乗っています。これも、争奪時期の上限年代にあたることになります。

資料33(図17)は、この苑池が立地する河岸段丘の地形と地質を示しています。河岸段丘地形は、土地利用のために人が破壊してしまうので、残ることは少なく、木庭も未だ見る機会がなかったのですが、ここでは見るができるように思います。地形からみて、資料32(図16)左側の破線で示した高まりなどから、この資料33(図17)のようなポイントバー地形と地質が想定されます。

資料34(写真16)の納屋そばには畑から除けた巨礫などが見られます。耕地外のこの付近をできれば掘りたいと考えていました。この巡検の際に、参加者の一人がここは父の土地で土日などに農作業の手伝いに来るとのこと。いわば運命的の出会いを感じて、掘るかもしれない場所で記念撮影したのが、資料35(写真17)です。翌日には地主さんの掘削許可を得ることができました。

奈良県遺跡地図Web¹⁰⁾で遺跡域から外れていることを確認し、2mL×3mW×1.5mDの立方体のトレンチを想定して、明日香村岡の建設会社の油圧ショベルによる掘削の見積書が用意できました。明日香村教育委員会事務局文化財課の指示で出向きました。明日香村、奈良県、国の許可が必要とのこと。費用は事務費が必要で50万円ほどになるとのことでした。まあ、覚悟したのですが、この小さなトレンチ調査に對して、榎考研は航空測量を求めるとも知れないと。この発掘の時点で明日香村文化財課が掘削を受け入れないことを把握しその足で、建設会社と地主さんと

訪ねて、トレンチ調査ができなくなったことを説明し、お詫びしました。

VII.3 明日香村特別措置法の実際

通称「明日香法」は正式には、昭和五十五年法律第六十号 明日香村における¹¹⁾歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法、という。全文とその解説は、電子政府総合窓口e-Gov¹²⁾にあります。

第三条には、「当該区域を区分して、都市計画に第一種歴史的風土保存地区及び第二種歴史的風土保存地区を定めるものとする」。「第一種歴史的風土保存地区は、歴史的風土の保存上重要な部分を構成していることにより、現状の変更を厳に抑制し、その状態において歴史的風土の維持保存を図るべき地域とし、第二種歴史的風土保存地区は、著しい現状の変更を抑制し、歴史的風土の維持保存を図るべき地域とする」とあります。以下、注目点に下線を施しています。

「奈良県の歴史的風土の保存」のページ¹³⁾にはまず「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法(古都保存法)」に関する記述があります。ここには、「古都における歴史的風土を保存するため必要な土地の区域が『歴史的風土保存区域』として指定され、さらに、この中でも特に重要な地域が『歴史的風土特別保存地区』として都市計画で決定されている」とあります。

さらに、次の但し書きが追加されています。「明日香村については、我が国の律令国家体制が初めて形成された時代における政治及び文化の中心的地域であったことをしのばせる歴史的風土が明日香村全域にわたって良好に維持されており、村全域を特別保存地区として保存する必要があるので、昭和55年に「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備に関する特別措置法」が制定されました。この法律により、古都保存法の特例として第1種及び第2種歴史的風土特別保存地区が定められ、明日香村の貴重な歴史的風土の保存と住民生活との調和を図るための措置が講じられています」とあります。

このページには、奈良県内の保存地区のリストが用意されており、明日香村については、第1種として、飛鳥宮跡105.6ha、石舞台5.0ha、岡寺7.5ha、高松塚7.5haが、第2種としてこれ以外の明日香村域2278haで、計2404ha(小数点以下1桁の計算では2403.6ha¹⁴⁾)にあたっています。ha単位の面積は奈良県のこのリストに表記されたものです。

そして、歴史的風土特別保存地区内で次のような行為をする場合には、当該行為の市町村長の許可が必要、とあります。その行為のうち、今回の木庭の申請について取立て挙げれば、4.土石の類の採取、です。ただし、この項目は土木工事や利益を得る行為の類を指しているものと考えてよいでしょう。

上記第三条にありますように、「第二種歴史的風土保存地区は、著しい現状の変更を抑制し、歴史的風土の維持保存を図るべき地域と」されています。

明日香村「都市計画と規制地区」¹⁵⁾には都市計画図が示されています。それが資料36(図18)です。この図では、縦縞模様の第1種歴史的風土保存地区とピンク塗色の第1種風致地区が一致しています。前述のように、第1種地区は4箇所ですが、105.6haの飛鳥宮跡は大官大寺を核とする地域と、飛鳥宮跡を始め飛鳥寺や檜寺などを含む地域からなっています。

橿原考古学研究所が管理する奈良県遺跡地図¹⁶⁾はネット上で公開されています。1/25,000表示または1/10,000表示を選択できます。この地図で、土壌業者や一般市民が土地改変などを実行す

る際に関心のある場所が遺跡指定されているかどうか、などの情報を確認することができる。この地図と明日香村の第1種歴史保存地区の位置関係が気になり、そして作成したのが資料37(図19)です。奈良県遺跡地図を見ると、青色による斜めクロスパターンは発掘された場所でそれを取り囲む不定形の領域は今後何らかの遺跡が発掘される場を示しているものでしょう。なお、県と村の公開資料はいずれも最新のものです。県の資料がその性質から見て、より正しいものと考えて良いでしょう。

木庭の関心のある前述したトレンチ想定場所は、資料1(図1)での土地所有者名白濱しに続く「さま細地東縁」ラベルを付した赤いピンの地点です。この場所は、資料37(図19)の史跡名勝飛鳥宮苑池の西方近辺にあたり、苑池とされる発掘場所を取り囲む不定形の範囲になっています。奈良県遺跡地図の情報をみると、遺跡データベース番号「ID 14D-0037」が振られており、遺跡名「飛鳥宮跡」とされており、木庭はこの作業を通じて、トレンチ予定地が第1種域に当たることがわかって、発掘許可を得る困難性を知ることになりました。とはいえ、資料37(図19)に示していますように、奈良県遺跡地図と明日香村都市計画図の間には、齟齬があります。

Ⅳ.4 飛鳥京前殿西方域の飛鳥川開削による破壊

資料38(写真18)の扇状地上の二つの白い壁の建物は飛鳥宮跡の資料館とトイレで、その右手の一段低い建物群は個人の家屋群で飛鳥川線状谷のa面に載っています。手前の小川は飛鳥川です。撮影者が立つ飛鳥川沿いの低地はb2面にあたります。飛鳥宮跡の資料館とトイレが載る扇状地面の手前の平坦面はb1面にあたっています。

資料39(図20)は、資料28(図14)の内郭部分を拡大して、地形分類図や発掘成果を載せたものです。内郭の前殿の東西に南北に長い建物跡があって、緑色は発掘されたもので、それに基づいて想定される建物が赤色で表示されています。この想定に誤りは無いでしょう。前殿の西の長方形の赤い枠は、飛鳥川の段丘a面の段丘崖か段丘面上に位置しており、このような不完全な場所に、南北軸の東西に対称に配置されるべき皇居が建設される筈はない。つまり、皇居建設のうちに、急激な飛鳥川線状谷によって破壊されたと考えてよい。つまり、この飛鳥宮Ⅲの成立年代が、飛鳥川の争奪、つまりは開削の下限年代となります。このような観点を理解するには、多少の地形学的素養が必要ですが、ここでは述べません。木庭(2018b)の第3章コラム「争奪過程で生まれた飛鳥川線状谷の河岸段丘形成年代」(pp.92-108)や第1章を読んでいただければ理解できます。

木庭(2018c)のこれに関する記述の一部を次に引用します。

元飛鳥川扇状地は砂礫層で構成されるために、人工的要因による下刻の回復は容易に進んだ。後岡本宮を挟んだ飛鳥川はa面から離脱し、b面に急激に移ったので、挟まれた後の後岡本宮の敷地は維持されることになった。維持されることになった、というのは、たとえば図4(この博物館報告の資料32(図16))に示した河岸段丘の上下とその周辺を見て、現在も崩壊地形などは見られず、維持されているからである。1947年米軍撮影、1971年国土地理院撮影のいずれの空中写真も同様であった。特に戦後すぐに撮

影された米軍写真では山林の植生などがかなり破壊されており、そういった環境であっても崩壊などが生じていないということである。齊明天皇前任の孝徳天皇は白雉5(孝徳10=654)年に難波宮で病死し、翌年、齊明天皇はかつて自ら(皇極天皇)が造営した飛鳥板蓋宮で重祚したのだが、火災に遭い、飛鳥川原宮に遷っている。さらに翌年の齊明2(656)年に後飛鳥岡本宮に遷っている。『日本書紀』齊明紀には、「この年(656年)、飛鳥の岡本にさらに宮地を定めた。おりから高麗、百濟、新羅が揃って使いを遣わし調をたてまつったので、紺色(つゆくさ色)の幕をこの宮地に張って、饗応をされた。やがて宮殿が出来ると、天皇はお移りになった。名づけて後飛鳥岡本宮という」とある。そのまま読めば、後飛鳥岡本宮の造営開始は齊明元(655)年と言えるだろう。以上から、付け替えによる飛鳥川線状谷形成の下限年代は齊明元(655)年で、上限年代は齊明六(660)年となる。上限年代は物理的で動かないが、下限年代については多少遡る可能性はある。遡る限界としては、白雉4(653)年ではないかと思う。この理由は省略する。

この前殿西の破壊された場所の現状を資料40(写真19)に示します。この中央部には左方向弧状に水路が走っています。これは吉野川分水路の一つで、吉野川東部幹線水路にあたります。この水路の右手は元飛鳥川の扇状地面で、左手には飛鳥川線状谷のa面の段丘崖の頂部に近い部分が見えているにすぎません。併せて、資料41(写真20)の後背には、吉野川分水から飛鳥川への取水の様子を示しています。

Ⅳ. 橋寺周辺

最終ラウンドに近づきました。橋寺拝観料大人350円、お釣りがなくが多く小銭を用意しておく必要があります。

Ⅳ.1 天香山軸上の橋寺仏塔跡

車の場合、東西道路から南つまり飛鳥寺に向かって右手の西口から入りますが、巡検では左手の正面にあたる東口(橋寺中門跡)から入ります。ただ、その前に「飛鳥宮都の谷」をまっすぐ北に眺望して、天香山を遠望します。古飛鳥川の元飛鳥川による争奪点も確認します。本年の巡検では、指差し説明に止まり、地形分類図を呈示しませんでした。

中門跡から佛頭山橋寺に入山して、橋寺の仏塔跡礎石を確認します。直径90cm、深さ10cmの円孔に心柱が入る孔で、これに副柱のための3個の半円孔(副柱孔)が付属しています。根拠をばくは知りませんが、およそ高さ40mほどの五重塔が想定されています。この心柱のための孔が天香山軸上に載っているのです。

資料43(図21)は飛鳥川線状谷の河岸段丘の分布を示したものです。飛鳥宮都の谷で、もっとも北に位置する大官大寺仏塔跡、中核部の天文台があった水落遺跡や間接的に立地する飛鳥寺、そしてもっとも南に位置する橋寺仏塔跡、と天香山軸は飛鳥宮都の谷を貫いています。これに沿って、右岸の苑池遺跡西縁の線状崖(資料32(図16)右図に軸を示しています)や左岸の段丘

要記

を切り取った線状崖（資料39（図20）の左岸の「人工平坦面」の西縁の南北方向の崖）も観察されます。

Ⅳ.2 古飛鳥川ルート歩く

橋寺が載る河岸段丘面は西門から亀石（資料44（写真22））まで続いています。座学の時間を確保できず、途中の中央公民館に入って終わりました。

元高取川の付け替え、見瀬の開削、高取川週上—飛鳥宮Ⅲへの参内ルートをイメージしてのルートでした（木庭，2018a）が、ここでは、巡検の流れに混乱が生じるので説明は省略します。

おわりに

中央公民館で座学と試験を実施しました。

1. 3～4名からなるグループでの学習 30分ほど

- a. この巡検でご説明してきた木庭の研究テーマをリストアップ
- b. 納得できたことと疑問に思ったことや反論。

2. グループと木庭と 30分ほど

各グループによって5分程度の質問や疑問について提案して頂いて、木庭が弁明する形をとる。

3. 試験30分ほど 1.と2.を踏まえて、自ら考えたことをまとめてもらう。試験の課題は次のようです。

- (1) この巡検でご説明してきた木庭の研究テーマを巡検の順序とは関係なく、論理的にまとめてください。
- (2) 上記のうち、納得できた内容を簡潔にご説明ください。
- (3) 上記のうち、反論をお持ちの場合、それを論理的にご説明ください。
- (4) 巡検運営について、改善の余地があると考えられる場合、ご提案ください。

予定では、上記の過程を取る筈であったが、グループ学習や木庭との議論の時間を取る事ができなかった。大きな反省点であった。答案を読ませて頂いて、皆さんは木庭の巡検の趣旨は理解されていた。幾つか事例を挙げるつもりで答案をスキャンしたが、来年度の巡検への否定的な影響も考えられたので、掲載しないことにしました。

注

- 1) Koba, M., 2019. Discovery of the heavenly North Pole axis on the summit of Mt. sacred Amanokaguyama running the Asuka Imperial Palace Cities Valley during the Asuka Era: the day excursion of autumn 2018 under the renewal system of teachers' certificates. Bulletin of Kansai University Museum, No.25, pp.1-35.
- 2) 筆者のウェブサイト http://motochan.sakura.ne.jp/public_html/KyozaiContents/33.htm
- 3) <https://www.amazon.co.jp/>にて、「飛鳥藤原京の山河意匠」で検索ください。

4) なら飛鳥京歴史ぶらり https://asukamura.com/?page_id=75

5) ASUCOME <https://www.asukanavi.jp/point.php?pid=567>

6) 安居とは、僧が一定期間、外出を避けて修行に専念すること。陰暦四月十六日に始まり、七月十五日に終わる。夏(げ)安居。雨(う)安居。サンスクリット語で雨季の意。ヒンズー教で陰暦月の始まりを満月後にするのはインド北部地域が主であり、仏教とつながるのではない。飛鳥寺は現在、真言宗山岳派に属する。

7) <http://www.manyo.jp/news/c95e7a949061c6465b99241c157c42350c2a7a3c.pdf>

8) なら旅ネット「飛鳥宮跡」解説：皇極天皇、斉明天皇（皇極天皇重祚）の皇居跡で、伝飛鳥板蓋宮跡とされていたが、継続的な調査で、飛鳥板蓋宮だけでなく、飛鳥岡本宮（舒明天皇）や、後飛鳥岡本宮（斉明天皇）、飛鳥浄御原宮（天武・持統両天皇）など、複数の宮が継続的に置かれていたことが判明し、平成28年に、名称が「飛鳥宮跡」に改められた。現在復元されている石敷広場や大井戸跡は上層の飛鳥浄御原宮のもの。

群談社 国指定史跡ガイド：6世紀末から7世紀後半まで飛鳥の地に営まれた飛鳥宮のうち、板蓋宮は皇極天皇が643年に遷都し、645年の大化の改新の舞台にもなった宮である。この地域では1959年（昭和34）以来継続的に調査が実施されており、掘立柱建物、塼、石組みの溝、石敷き遺構など、多くの遺構遺物の検出をみている。名称として板蓋宮跡となっているが、この前には飛鳥岡本宮が、この後には後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮がほぼ同じ場所に造営されている。その中心部とみられるのは、この平坦地南西寄り部分で、東西約130m、南北230m以上と推定される回廊をめぐらす一面。整然と殿舎が配置され、7世紀後半のわが国の都城制の発展をみるうえで、きわめて重要とされ、1972年（昭和47）に宮内省東部部の大井戸を中心とした一画が国の史跡に指定された。その後、建物遺構にもとづいて、往時の建物などの状況を植栽で、柱穴をコンクリート立柱でそれぞれ明示し、建物・大井戸周囲の玉石敷は復元・整備された。

9) (万葉歌碑データベース <http://kahi.nara-hgis.jp> の開院) うちひさつ 三宅の原ゆ ひた土に 足踏み 貫き 夏草を 腰になづみ いかなるや 人の児故そ 通はすも我子 うべなうべな 母は知らじ うべなうべな 父は知らじ 雉の腸 か黒き壁に ま木綿もち あざさ結び垂れ 大和の 黄楊の小櫛を 押へ挿す うらぐはし児 それぞ我が妻。

(折口信夫【口譯萬葉集(下)】口語譯) 三宅の原をば、地面(じべた)にぶすぶすと足を突き込んで、夏草を腰で押し分けて、はかどらないが、進んで行き、さうして一體、どうした家の娘さんか知らぬが、苦心して通うて行きなさるのだ。坊ちゃん。

おつかさんの知らないのも、無理はない。お父さんの知らないのも尤だ。真黒な髪をば、木綿ででかかがつて、結び垂し、黄楊の小櫛をおさへにして、さしてゐる美しい娘は、即自分のいとしい人だ、と思うてください。

(木庭) この折口訳には、母親が息子に問うて、その息子が母親に込めている様子が伝わる点で優れている。息子やその両親はより住環境の良く管理された高台で暮らしている様子も理解できる。黄楊櫛が人々の暮らしと恋愛を語る優れた歌と言え、遺跡管理者の黄楊を植える根拠となつたのではと思考する次第である。

10) <http://www.pref.nara.jp/16771.htm>

11) おける、という表現は無自覚に論文タイトルなどでも多用されているが、これは無用の長物と木庭は考える。半世紀前に木庭に注意喚起して下さったのは牧田巖先生であった。理由などのご説明は残念ながら忘れたのであるがその後、おいて、という表現の役割、功罪を考えてきた。この「明日香

Text file
に追加
する →

<一行アゲ>
ほか、資料1~44すべては、木庭ウェブサイト +
トップページ http://motochan.sakura.ne.jp/public_html/index.html
で、関西大学博物館紀要25と併せて参照できる。

資料1(図1)中の文字が
小さくて読めません。
↓
案内地図の役目が果てません
↑

村における」は、「歴史的風土の保存及び生活環境の整備等」に掛かるようである。「における」は、明日香村のある条件を満たす場所という意味にも解することができるので、この法令の趣旨からすると、「明日香村全域の」とすべきところである。

- 12) http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=355AC000000060
- 13) <http://www.pref.nara.jp/12757.htm>
- 14) 奈良県公式の市町村面積は次のウェブページによれば、24.08km²=2408haであり、2403.6haと比べると、この法令に基づく面積は4.4ha小さくなっている。<http://www.pref.nara.jp/secure/8990/n180402.xls>
- 15) https://asukamura.jp/gaiyo/pdf_2_9.pdf
- 16) <http://www.kashikoker.jp/scripts/RemainsNara.cgi>

文献

青木敬. 2017. 土木技術の古代史. 吉川弘文館.
 明日香村. 2014. 飛鳥宮跡保存活用構想検討報告書. 明日香村. 57p.
 折口信夫. 1955. 口語萬葉集(下). 折口信夫全集. 第5巻. 中央公論. (この芳賀矢一によるあとがきには、次の記述がある。「著者は未熟の書として早く絶版に附し、幾度か自ら解譯を企てたが、遂に完成を見なかった。今日、この書を全集に収めて再刊することは著者の意に背くが……」)
 本庭元昭. 2017a. 天香具山山頂を通過する天の北極軸を基軸とする古代飛鳥寺域と水落遺跡の飛鳥川争奪前後の占地. 関西大学博物館紀要. No.23. pp.1-17.
 本庭元昭. 2017b. 飛鳥時代の水落遺跡から観測された天球. 関西大学文学論集. Vol.67. No.1. pp.29-63.
 本庭元昭. 2018a. 飛鳥時代斉明期の高取川見瀬付け替え. 関西大学博物館紀要. No.24. pp.1-33.
 本庭元昭. 2018b. 飛鳥藤原京の山河意匠—地形幾何学の視点—. 関西大学出版部. 241p.
 本庭元昭. 2018c. 飛鳥川争奪の発見から斉明期の付け替えの確認へ. 月刊地理. Vol.63. No.4. pp.78-85 及び11絵写真8).
 奈文研(花谷浩). 1997. 飛鳥寺西門地区の調査(1996-1次). 奈文研年報. 1997-II. pp.44-51.
 成迫法之. 2010. 天香久山と献傍1)の出土研究—その土器原料としての物性について—. 全地連「技術フォーラム2010」那覇. 報告49. (全2ページ). <https://www.web.gis.jp/e-Forum/2010/049.pdf>
 花谷浩. 1999. 飛鳥池工場の発掘調査成果とその意義. 日本考古学. 第6巻. pp.117-126.



地名が読め
ませんので
Nos.を入れた図
に替えて下さい。
→
マップも
お視用の紙の
にしてください

資料1(図1) あすか巡検マップ(2018年10月6日実施)
台風のために急遽、コース変更をしたことを踏まえて、巡検後の変更を反映している。



資料2(写真1) 水落遺跡基壇中央から北方の天香具山(左の写真)と甘樫丘(右の写真)を望む
本庭(2017, p.60, 図12). 本庭(2018b, p.141, 図12) 2017年6月25日筆者撮影

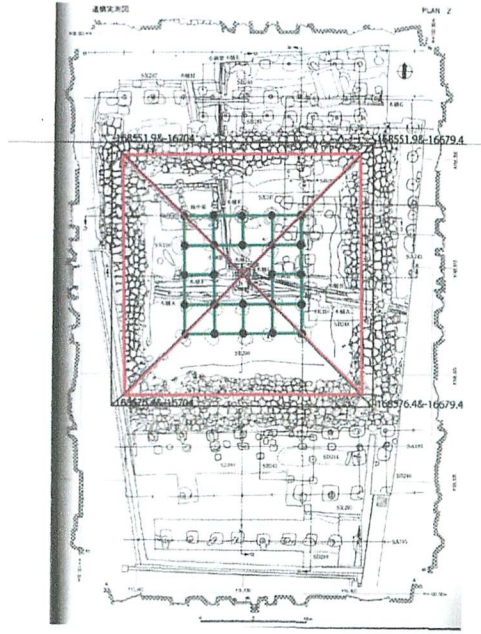
西方の

修正した
text fileは
入らない

右上の資料1

右下の資料2

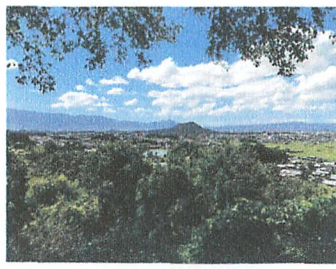
高さの4/5に縮小可能
かと思いたす。



資料3 (図2) 水落遺跡の格子構造 (測量図配置)
 本庭 (2017a, p.3, 図2) 本庭 (2018b, p.75, 図2) : 遺構実測図

位置名称	画像 (cm)		旧CS6 (m)		参考: 天香具山山頂の easting 値
	x	y	easting	northing	
左上頂点	44.89	83.37	-16432.00	-168909.00	-16692.49
右上頂点	120.31	83.37	-16429.00	-168909.00	
左下頂点	44.89	184.78	-16432.00	-168913.00	
右下頂点	120.31	184.78	-16429.00	-168913.00	
新CS6 (m)					
			easting	northing	
柱心交差心 PjC	92.34	127.94	-16430.78	-168910.26	-16692.43 -168563.62
CS6交差心 CsC	91.85	133.68	-16430.78	-168910.32	-16692.43 -168563.68
PjC - CsC	0.49	-5.74		0.06	
黒崎の漏刻台心 KuC	96.38	137.65	-16429.95	-168911.14	-16691.60 -168564.50
想定方格城心 A1C	94.20	128.32	-16430.04	-168910.77	-16691.69 -168564.13
A1C - PjC	1.86	0.38	0.74	-0.51	

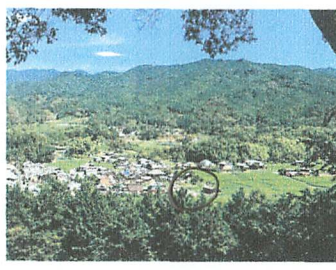
資料4 (表1) 水落遺跡基壇中央4心の座標値
 本庭 (2017, p.33 表1) 本庭 (2018, 第4章, p.113 表1)



資料5 (写真2) 甘樫丘から欽傍山を眺望
 Aug. 25, 2018 撮影 甘樫丘から北西方向。
 サン＝テグジュペリ作『星の王子さま』に出てくる象が入っている帽子のような山。

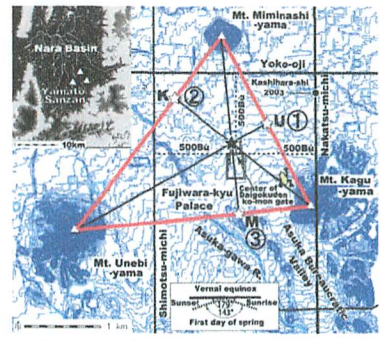


資料6 (写真3) 甘樫丘から耳成山と天香具山を眺望
 Aug. 25, 2018 撮影 甘樫丘から北方向を眺望。耳成山と天香具山との間の耳成山寄りから北方向。左手の円錐形の山が耳成山で、右下の標に長い山の最高点付近が天香具山。藤原宮跡は耳成山方向の軸線上の芝生付近。

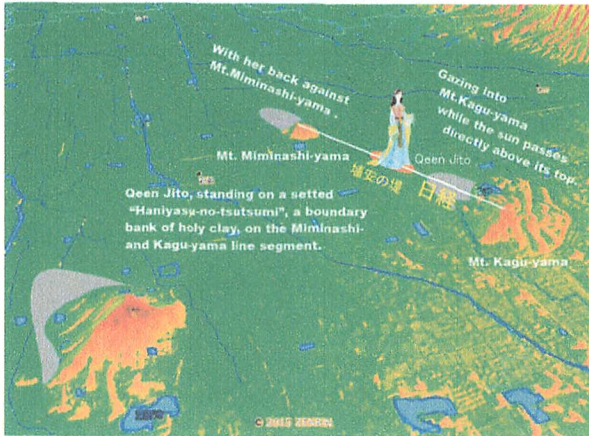


資料7 (写真4) 甘樫丘から飛鳥の谷を眺望
 Aug. 25, 2018 撮影 甘樫丘から東方を眺望する。手前の甘樫丘の樹林上縁に接して、飛鳥寺西門遺跡が見える。ここから右手の水田域の後方の竹やぶには駐立万葉館がある。

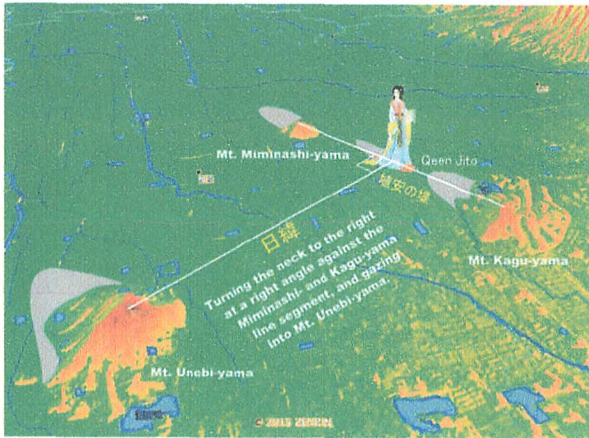
(白)の円で指示



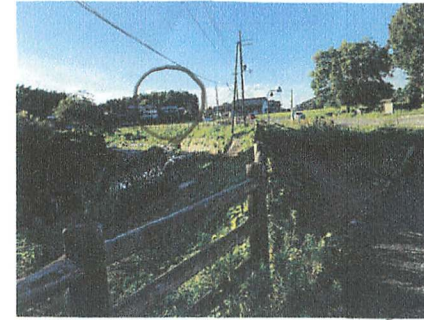
資料6 (図3) 大和三山の垂点と垂心 (太極)
 本庭 (2018b, 第4章, p.190, 図1)



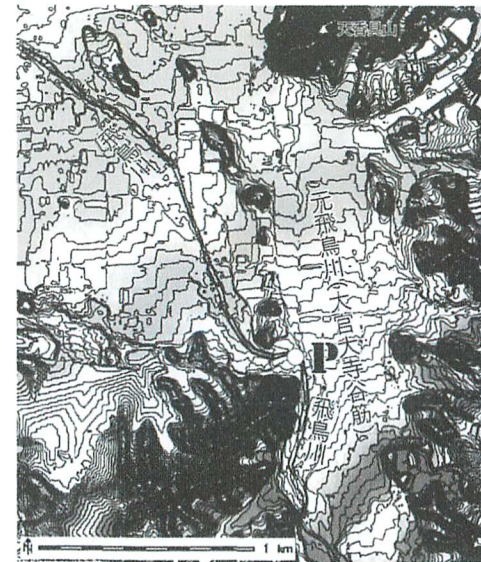
資料9 (図4) 「御井の歌」に詠われている持統天皇による山見儀式の解釈
本庭 (2018b, 第VI章, p.194, 図2上図)



資料10 (図5) 「御井の歌」に詠われている持統天皇による山見儀式の解釈
本庭 (2018b, 第VI章, p.194, 図2下図)

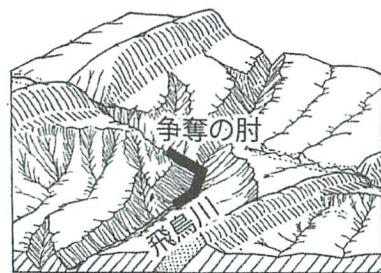


資料11 (写真5) 水落河川争奪地点の現況
Aug. 25, 2018撮影 中央に見える電信柱の左手の丘が雷丘にあたる。

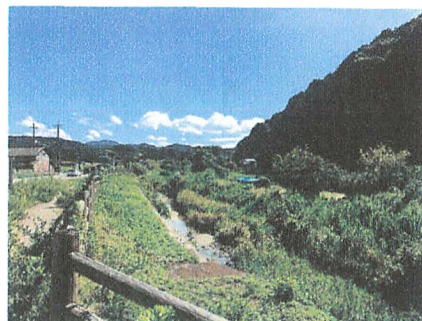


資料12 (図6) 飛鳥川水落付近の流路急変部の地形
本庭 (2018c, 図1)

左手の抵抗柳は、その右下の Asuka-dera の詳細地図。

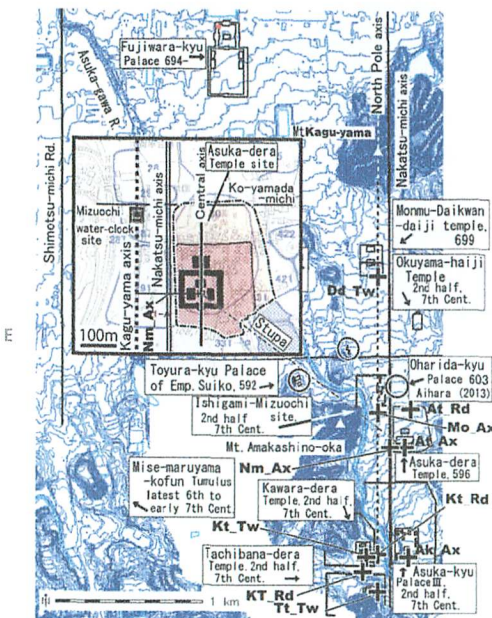


資料13 (図7) デービスによる河川争奪の模式図に飛鳥川の争奪を重ねる
本庭 (2018c, 図2)



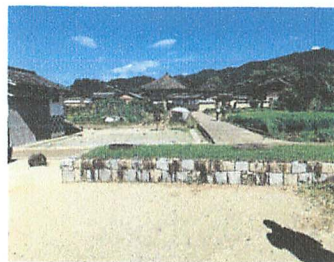
資料14 (写真6) 飛鳥川の左手の河岸段丘c面と右手のd面
Aug. 25, 2018撮影

(おすか夢の楽市)

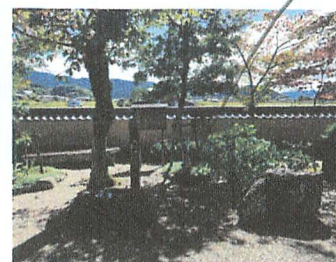


資料15 (図8) 飛鳥京に見られる寺院遺跡と皇居遺跡の天香山軸と中ツ道軸との繋がり
本庭 (2018, p.210, 第1章図4)

現飛鳥寺
境内にあり、



資料16 (写真7) 飛鳥寺西門跡
飛鳥寺西門跡から現飛鳥寺を望む。Aug. 25, 2018撮影



資料17 (写真8) 創建当時の飛鳥寺仏塔心礎中心
飛鳥寺西門跡から現飛鳥寺を望む。Oct. 5, 2018撮影
私たちの移動途中で見る事ができます。

(水筋右手の小屋が立つ面)



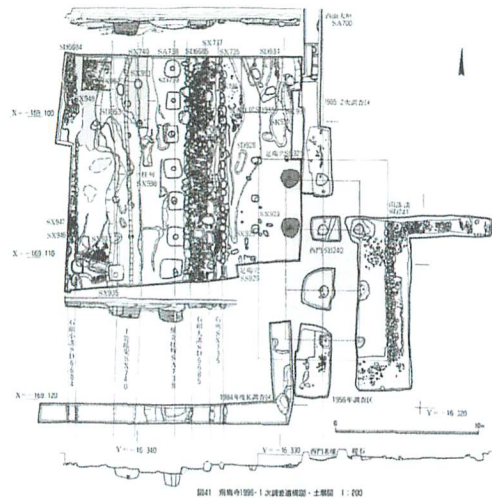
資料18 (図9) 飛鳥寺復元図

出典: <http://www.9plala.or.jp/kinomuku/asukadera.html>



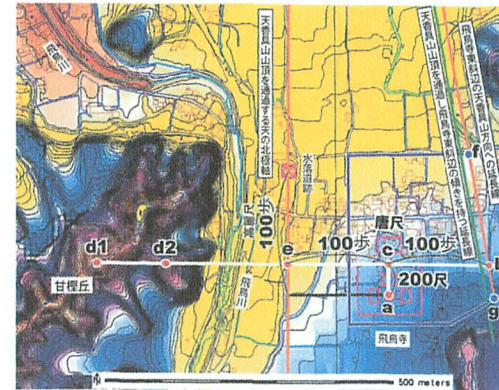
資料19 (図10) 八脚門の例

出典: 社寺建築の知識「三間門柱(本柱)が4本ある門です。4本の門柱の前後に持柱(ひかえばしら)が計8本あることから「八脚門」と呼ばれます」



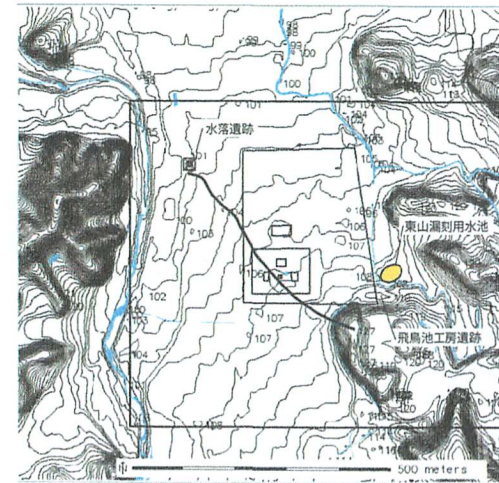
資料20 (図11)

余文研(花谷浩), 1997, p.46



資料21 (図12)

本庭 (2018b) 第1章コラム:「飛鳥寺埴東斜道から唐尺を使って推古紀の天香具山麓および甘樫丘軸を捉える」の図3



資料22 (図13) 飛鳥寺域付近の小分水嶺

本庭 (2017a, 図6)



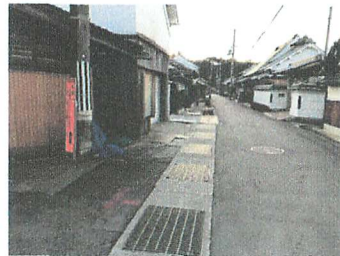
資料23 (写真9) 仮称「東山漏刻用水池」の堤
Oct. 4, 2018撮影



資料24 (写真10) 「東山漏刻用水池」に接して流れる現在の用水路
Oct. 4, 2018撮影



資料25 (写真11) 飛鳥池遺跡での受講者
Oct. 6, 2018撮影

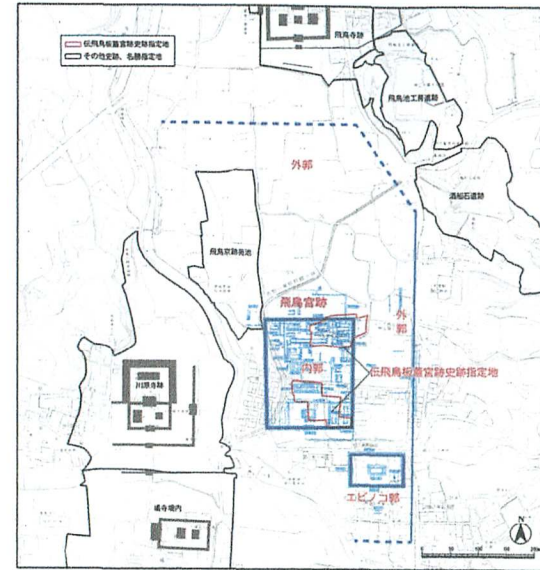


資料26 (写真12) 明日香村飛鳥集落内の水落遺跡
に向かう用水路
Oct. 5, 2018撮影



資料27 (写真13) 手前は水平に設置された吉野川分水で右手奥の低い山陰は甘橙丘
Oct. 5, 2018撮影

黒



構想の対象範囲図

資料28 (図14) 明日香村の飛鳥宮跡保存活用構想
明日香村 (2014, p.4)の構想の対象範囲図



資料29 (写真14) 飛鳥宮跡内郭北東部の大井戸跡
Aug. 25, 2018撮影

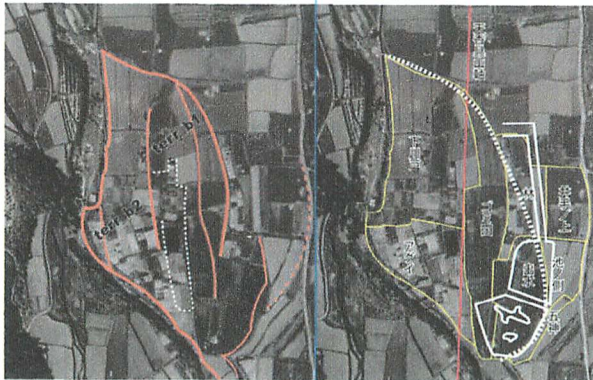


資料30 (写真15) 飛鳥宮跡苑池北池発掘現場
Aug. 25, 2018撮影

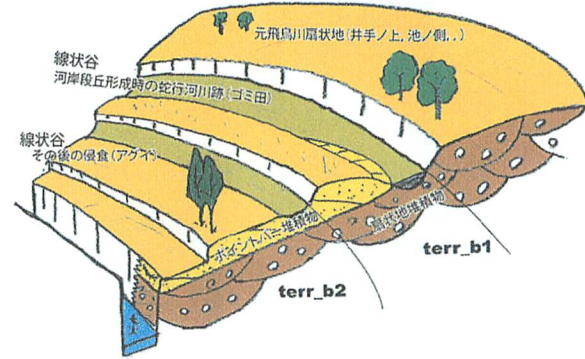
天香山の北方上空から
天の北極軸南方向と向き



資料31 (図15) 飛鳥宮跡池北池発掘現場
本庭 (2018, 第3章コラム, p.93, 図1)



資料32 (図16) 実体写真: b面上の地形 (左図) と小字区分 (右図)
本庭 (2018, 第III章コラム, 図3)



資料33 (図17) 飛鳥川b面上のポイントバー地形と想定される地質
本庭 (2018, 第3章コラム, 参考図)

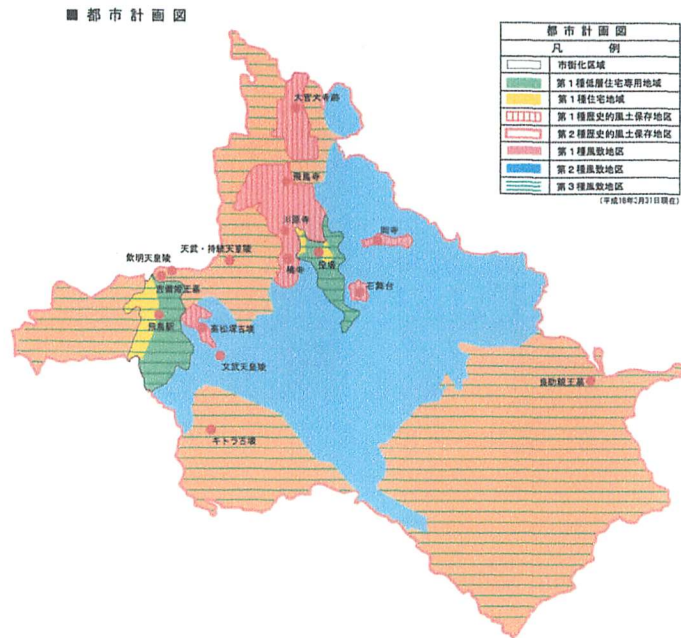


資料34 (写真16) 飛鳥川b2面上の礫層
Aug. 25, 2018撮影

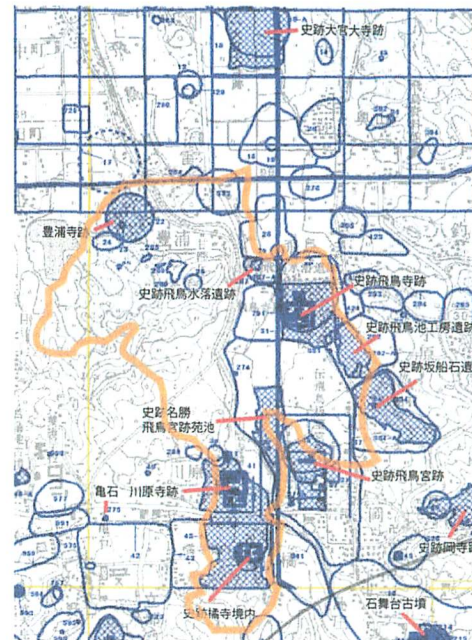


資料35 (写真17) 飛鳥川b2面上で巡検の様子
Oct. 6, 2018撮影

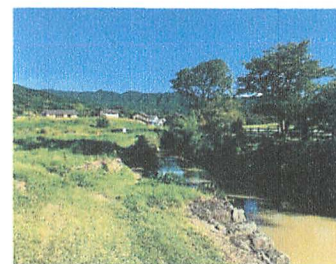
9



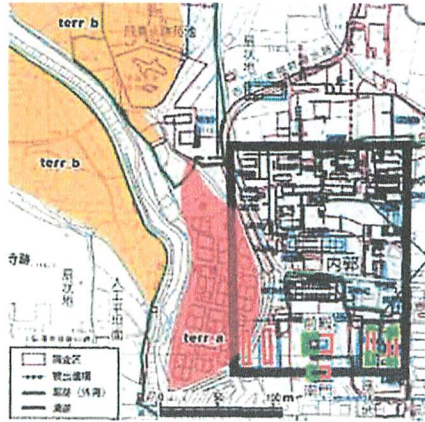
資料36 (図18) 明日香村都市計画図
https://asukamura.jp/gaiyo/pdf_2/9.pdf



資料37 (図19) 奈良県遺跡地区の上に明日香村都市計画図の第1種歴史保存地区の飛鳥宮跡が含まれるもっとも広い領域を重ねる



資料38 (写真18) 飛鳥川b2面から飛鳥川上流方面を見る
 Aug. 25, 2018撮影



資料39 (図20) 飛鳥宮III期遺構の周辺
と後飛鳥岡本宮に関する記述を
図化したもの
本庭 (2018, 第3章コラム, 図4)

前殿付近



資料40 (写真19) 前殿西方が抉られている場の現状
Aug. 25, 2018撮影

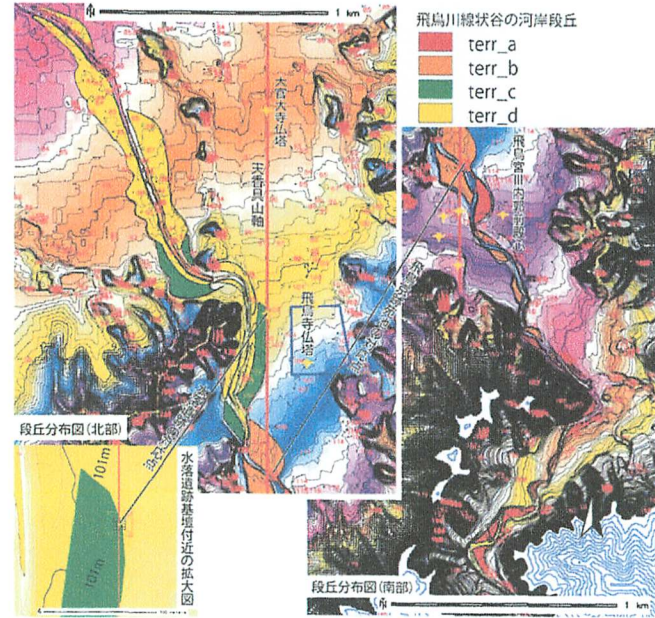


資料41 (写真20) 上位の吉野川分水路から
飛鳥川へ取水
Aug. 25, 2018撮影

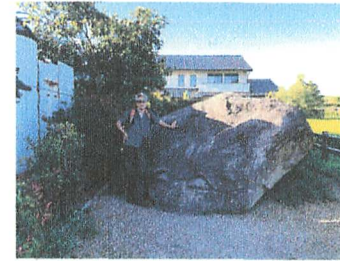


資料42 (写真21) 橋寺の仏塔礎礎石
Oct. 6, 2018撮影

に取水している様子



資料43 (図21) 空中写真判読による飛鳥川線状谷の段丘区分
本庭 (2018c, 図3)



資料44 (写真22) 古飛鳥川段丘面上の亀石